

|           |                                                                                      |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 氏 名       | さき 崎 やま 山 おさむ 理                                                                      |
| 学位(専攻分野)  | 博 士 (文 学)                                                                            |
| 学 位 記 番 号 | 論 文 博 第 470 号                                                                        |
| 学位授与の日付   | 平 成 16 年 11 月 24 日                                                                   |
| 学位授与の要件   | 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当                                                              |
| 学位論文題目    | Comparative and Historical Studies of Micronesian Languages<br>(『ミクロネシア諸言語の比較と歴史研究』) |
| 論文調査委員    | (主 査)<br>教 授 庄 垣 内 正 弘      教 授 徳 永 宗 雄      教 授 吉 田 和 彦                             |

### 論 文 内 容 の 要 旨

ミクロネシアは言語系統としてオーストロネシア語族のみが分布する地域であるが、その下位分類における系統のあるいは形態的な統一性は存在しない。なお、近年の慣用では、台湾諸語を含まないオーストロネシア語族はマライ・ポリネシア語族と称するようになってきているが、以下、そのままオーストロネシア語族を使い続ける。従来、ミクロネシアの諸言語に対しオーストロネシア語族のなかで独立した一語派の地位を与える説、オーストロネシア語族のなかの三語派、すなわち旧名称ではインドネシア、メラネシア、ポリネシアのいずれかの語派に各言語を帰属させる説、あるいは、そのなかでも言語構造的に均質性の高いカロリン群島中部のチューク諸語に東部のポーンペイ語、コシャエ語、マーシャル語、キリバティ語などを含めて中核ミクロネシア諸語と呼ぶ説などがある。しかし、この最後の説においてもチューク諸語とそれ以外の諸言語、さらにそれ以外の諸言語間に見出される相互の隔たりの大きさは無視できない。西部のヤップ語の系統については、オセアニア諸語(旧メラネシア語派・ポリネシア語派を含む)に帰属することが「かなり確か」と言われる一方で、西部マライ・ポリネシア語派に帰属させる説すら現れている。またチューク諸語の一つ、ウリシー語の干渉を受けて形成されたヤップ語の一方言、ングルウ語のような例もある。ただし、本論文では直接の研究対象としていないが、ミクロネシアのポーンペイ州のはるか離島で話されるヌクオロ語とカピングマランギ語は系統的にポリネシア語派に分類され、外郭ポリネシア諸語とも呼ばれるようにポリネシア諸語としての統一性が非常に高い。これは、他の諸言語に比べてミクロネシアへの移住とその歴史が浅かったためと考えられる。なお、本論文ではポリネシア諸語については独立した研究の対象としていない。

考古学的にはミクロネシアへの人々の移動は、紀元前2000年頃、フィリピン方面から始まったと言われる。また三分類説では、ミクロネシア西部のマリアナ諸島のチャモロ語とカロリン群島西部のパラオ語とは西部マライ・ポリネシア語派(旧インドネシア語派)に属すると言われてきた。確かにそれら諸言語間との共通性は高いものの、チャモロ語とパラオ語には西部マライ・ポリネシア語派とは一線を画する顕著な言語的特徴が見られる。ミクロネシアは小さな島々と環礁の集合体であるが、言語的に見ると極めて多様性に富んだ地域である。すなわち、ミクロネシアという限定された地域で諸言語が語族として分化し変化した過程を、さまざまな言語学的要因を考慮しながら全体として跡づけることは言語史研究からも意義深く価値あることである。以上のような展望に基づき、各部各章の構成と要旨は以下の通りである。

本論文は2部に分かたれ、第1部第1章から第6章までは、チューク諸語あるいは中核ミクロネシア諸語の言語比較による言語系統の再検討、第2部第7章から第9章では、言語資料として書き残された記録の分析に基づく言語史の考察を試みている。

第1章「西カロリン群島の諸言語の系統的検証」では、チューク諸語に共通して現れる所有表現の譲渡可能・不可能の区別がパラオ語とチャモロ語(旧インドネシア語派)、ヤップ語(旧メラネシア語派)でも行われ、またヤップ語には西部マライ・ポリネシア語派的な接辞法が見られる。このような表現の発生した背景には、この地域における言語的多層性を想定する必要があることが具体的に論じられる。

第2章「西カロリン群島における東西文化交流」では、とくに語彙面からミクロネシア独自の地域的(二次的)祖語が再

構成される一方、ミクロネシアと西部マライ・ポリネシア語派との同族語のほかオセアニア諸語との同族語が示され、近代以前における巧みな航海術を駆使したミクロネシアの人びとの広域にわたる活動が明らかにされた。

第3章「チューク諸語、ポーンベイ語、コシャエ語の系統的位関係」では、中核ミクロネシア諸語の特徴を原オーストロネシア語の変化から説明することも可能であることが示された。中核ミクロネシア諸語と呼ばれる統一体は、オーストロネシア語族東部のオセアニア諸語に見られる唇軟口蓋音の共通的变化（\*bw, \*mw がそれぞれ、\*\*p と \*\*pw, \*\*m と \*\*mw に割れる現象）によって説明されているが、この特徴だけを取り上げるならば、中核ミクロネシア諸語はオセアニア諸語の中に吸収されてしまい、文法的特徴に基づく統一性を無視することになる、と論者は主張する。

第4章「ニューギニア・ミクロネシア間の言語系統的証拠」では、ミクロネシアと北部で接するニューギニアとの言語的関係を論じている。従来、オーストロネシア語族の民族移動はニューギニア北方から東方のオセアニアに向かったとされ、ミクロネシアとの関係についての議論は十分にされてこなかった。とくに本論文では、ミクロネシアと隣接するニューギニアの、オセアニア諸語に属するアドミラルティー諸島の言語との比較から民俗語彙を含む地域的祖語が再構成され、またとくにヤップ語との間では数詞を含む語構成法の類似が存在することが示された。さらにヤップ語とアドミラルティー諸島の言語との関係については、第6章で詳細に論じられている。

第5章「言語接触から見たングルウ語の特徴」では、ヤップ島の離島、ングルウ環礁（日本南洋時代の名称ではクツルウまたはヌグール）で20数名によって話されるングルウ語が分析、記述されている。チューク諸語はミクロネシア連邦のチューク州のチューク語を除き、すべてがミクロネシアの離島（多くは孤島）で話される少数話者言語であり、そのほとんどが本島の優勢言語であるパラオ語、ヤップ語の傘下に置かれて、現在、消滅の危機に瀕している。ヤップ州のングルウ語は、音韻面ではヤップ語に特徴的な喉頭化音を消失し、シンタックス面では重点形式構文を多用するという、チューク諸語の一つであるウリシー語の影響を強く受けた特異なヤップ語の一方言であることが明らかにされ、ングルウ語がウリシー語の方言であるとする通説の誤りを正している。（参考論文として添付した『西部太平洋における少数民族言語の研究』には、以上の理由によって本論文第1章から第5章も採録している。）

第6章「ヤップ語の系統的特徴」では、歴史的また現行の音声（音韻）表記のさまざまな問題を論じる一方、短母音と長母音の対立は、後者が祖語形における二つの短母音の縮約によって発生したことを明らかにし、生成音韻論的に提示された基底形は語史的に見て矛盾があることを指摘している。またオーストロネシア語族における下位の系統について未解決の問題が多いヤップ語について、論者は、その言語形成における構造的な多層性を原オーストロネシア語に由来するもの、地域的祖語形である原ミクロネシア語（原オセアニア語に含まれることもある）に由来するもの、さらに借用語のレベルに分類することによって説明を試みている。

本論文の第2部では、文字の伝承のないミクロネシアにおいて漸く17世紀にはいりヨーロッパ人の渡来によって書き残された言語記録の他、19世紀以降、日本人の漂流民や探検家による仮名文字の言語資料もその貴重さのゆえに解説し、それぞれの言語の音韻史研究のなかに位置づけている。

第7章「チャモロ語・パラオ語の重層的特徴」では、チャモロ語とパラオ語とは西部マライ・ポリネシア語派に顕著な接中辞をも含む体系化された接辞法を保持するという文法的特徴がある一方、西側の言語とはかなり異なる音韻的、文法的特徴が認められる。とくに音韻面では喉頭音を伴う原オーストロネシア語語頭母音の変化において、語頭母音にチャモロ語の母音にパラオ語の声門閉鎖音が前出する対応系列のほか、チャモロ語 gw- にパラオ語 ng- が前出する系列が見出される。17世紀、スペイン人神父サン・ヴィトレスによって書かれたマリアナ語（チャモロ語）の記述を参照しつつこの特徴を比較分析し、その起源を両言語の共通期に存在した指示的機能を表す \*u- に由来すると推定した。また文法的特徴では、両言語に見られる範疇詞の発達を指摘し、その起源について基層言語によるものと推定している。

第8章「日本人探検家による19世紀のポーンベイ語資料」では、明治23年（1890）南島探検に赴いた鼎軒田口卯吉の巡航記に仮名書きで残されたポーンベイ語をその書記法と記述法を分析することによって現代語との比較を試みている。ポーンベイ語そして第9章で論じるパラオ語では親族名称、部分名称などは構成法では人称接尾辞を伴った形でしか言うことができない。ポーンベイ語ではゼロ語尾が三人称単数を意味する。それら項目に対し与えられた現地語形には変則的な人称接尾辞が付いていることを明らかにした。また百語余りの項目のなかに「首級」という生々しい語が含まれているのは、スペイ

ン軍によってボーンベイ人の愛国者が処刑された事件を、田口がたまたま目撃したためである。

第9章「18世紀以降のパラオ語資料の解説研究」では、1783年パラオ諸島で座礁したイギリス船の修復後、イギリスに同道させた20歳のパラオ人王子からパラオ語を聞き取ったイギリス人 G. キートおよび J. P. ホキンの数百項目以上の単文を含む語彙資料、1821年パラオ諸島で難破し、1826年帰国した日本人漂流民たちからの聞き取り資料と上述の田口卯吉による資料に基づき、現代パラオ語に特徴的な声門閉鎖音が口蓋垂閉鎖音から摩擦音化を経て現れたこと、さらに現代語では声門閉鎖音の消失現象があることなどを資料の表記法を通して明らかにした。ただし、キート・ホキンの資料には英語項目に対して意味不明の対訳語が見出されるが、これには禅問答のような内容が含まれていることが判明した。たとえば、「右側・左側」を「私の側・あなたの側」、「エビ」を「引き潮まで待て」などと返答している例である。このような言語が記録されたのは、英語が未熟な、しかもロンドン滞在半年にして天然痘で死去した一人のインフォーマントからしか情報が得られなかったためである。

### 論文審査の結果の要旨

言語分布上、ミクロネシアはオーストロネシア語族の一部に位置づけられる地域にすぎないが、そこにみられる諸言語の系統的、構造的多様性はあたかもオーストロネシア語族全体のなかの縮図のごとき様相を呈している。その多様性は、古くは西方のフィリピンやインドネシアから、そしてその後の東南のメラネシアとくにソロモン諸島、ヴァヌアツ、南方のニューギニアからの民族の交流と累積に起因している。論者は、言語系統論の大分類主義、一元的系統論に追従することなく、言語の形成における成層性を検討し、ともすればアナクロニズムに陥りがちな従来の比較再構法を見直し、各言語の形成過程において発生した「地域的祖語形」を形態法から検証するとともに、基層言語からの干渉についても論及している。このような論旨の展開は、論者が長年にわたって行ってきたインドネシア、マレーシア、マダガスカル、ヴェトナム、海南島、ニューギニアなどにおけるオーストロネシア語族のフィールドワークとその言語比較研究の成果から得られたパースペクティブによって裏付けられていると言える。

本論文は、第1部 Comparative Studies（比較研究）と第2部 Historical Studies（歴史研究）の2部に分かれており、併せて9章から構成されている。本論文（英文203頁）以外に参考論文（英文171頁）1点も提出されている。本論文の内容は以下の三点に要約できる。

（1）ミクロネシアには、この地域のための言語系統上の統一性はないといわれているが、そこで話される諸言語間には差異と同時にとりわけ語彙面、文法面に多くの共通性がみられる。論者はとくに中核ミクロネシア諸語として分類されている諸語を詳しく検討し、その中のチューク諸語を核としてそれ以外の諸言語との関係を音韻、語彙面から明らかにしている。また文法面については、ミクロネシアのすべての言語において、程度の差はあれ被所有物のカテゴリー化が行われ、範疇詞の発生をうながしている他、そのカテゴリー化は所有代名詞の区別にも現れるとし、このような現象は西部マライ・ポリネシア語派の諸言語には見出せないものであり、この現象に関する限り、ミクロネシアの諸言語はオセアニアの、とくにメラネシア諸語に構造的に近いものと主張している。また、範疇化の起源については、先住民族言語からの干渉によるものと一般に言われているが、とりわけアドミラルティー諸島の言語との関係を考察した上で、その可能性が最も高いのは現在のバプア諸語であると推定している。

被所有物のカテゴリー化に関する論者のこの意見は独創的であり高く評価できる。しかし、さらなる比較資料の充実と網羅的調査とが要求されることも確かである。

（2）オーストロネシア祖語音からみたミクロネシア諸言語における音韻変化の複雑性、多様性、あるいは二重対応性については、従来からも注意されてきたが、その説明は場当たり的で、十分な説得力をもつものではなかった。これに対して論者はまずヤップ語について検討し、ミクロネシアにおいて系統上もっとも困難な問題を抱えている点を音韻面から明らかにした上で、その言語史において地域的に形成された多層性のあることを主張した。つぎにチャモロ語とパラオ語においても、それらが西側のフィリピン、インドネシアの諸言語と異なった音韻特徴をもつに至ったのは、その過程で独自の「地域的祖語」形成期のあったことによるものと主張した。

言語系統樹モデルに基づく比較言語学の枠組みの中に、言語接触、言語混合、言語多層性などの問題を含めて議論する方

法は、近年漸く一般に行われるようになったもので、その方法を用いた論者の記述は新鮮で説得力がある。この方面の研究に与える影響は大きい。

(3) 過去の言語資料に基づく分析研究では、残された文字資料の表記を通して現代に至る音韻の変化が示された。さらに、パラオ語の資料についてはこれまで不明とされてきた難解語句の適正な解釈が行われ、そのテキストの特徴と内容全体が論者によって初めて明らかにされた。またこの中では不明とされてきた動物・植物名の考証も厳密に行われている。

18世紀以降に書かれた資料類であるが、言語変動の激しいこの地域の文字記録としては重要な内容が含まれており、論者の記述は価値あるものとして評価できる。ただし、資料に表記されている文字はローマ字、仮名文字とも近代の文字であり、その分析記述を decipherment (解読) と論者が呼ぶのは適当でない。

上記3点に要約した本論文は、オーストロネシア語族研究者である論者が、過去20年余にわたるフィールドワークに基づいておこなわれたミクロネシア諸語研究の成果をまとめたもので、内容の多くはすでに論文として発表され、内外の学術雑誌等にもしばしば引用されている。ミクロネシア地域の個々の言語を対象とする研究者は少なくない。しかし、ミクロネシア全体を鳥瞰し、その言語的多様性を言語発生と言語形成の両面から同時にとらえようとする論者の方法は独創的であり、記述内容の水準は極めて高いといえる。本論文がミクロネシアのみならず広くオーストロネシア語族研究に寄与するところは小さくない。

ただし、本論文には統語論に関する記述がほとんどみられないし、形態論についての記述も十分とはいえない。それらの面における系統論的あるいは類型論的特徴の解明が今後の課題として残されている。また、しばしば論者独自の用語が使用され、中には定義不十分なものもみられる。さらに、内容に注記を必要とする箇所もある。だが、それらの欠陥が本論の価値を大きく低めることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年9月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。